

# フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

心待ちしている秋の便りを知らせる童謡「虫のこえ」に登場する蟋蟀(コオロギ)。長い触角と太い後ろ脚を持ち、ジャンジャンと跳

ね「コロコロコロ」と秋の気配の漂いを知らせる。藤原敏行朝臣の「秋来ぬと 目にはさやかに見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる」の詩、目の景色からは、秋のきざしが見えないけれど、木の枝を通り抜ける風の音を聞くと、秋の来たことを、はっと、気づかされ、まさに猛鷲が直ぐにでも去ってほしい」との想いを詠んでいると強く伝わってくる。

昔から地域に伝わる「風が秋を運んできたくれる」を期待しているが、この風(かせ)を(かぜ)と詠むと、風習

など「慣習、流儀」、風情などの「趣味わい」、風体(ふうてい)など「なりふり、姿」、風景など「自然の景色」、風評など「うわさ」、風刺など「ほのめかさ」と、気風など「気構え」、更に風邪・中風な

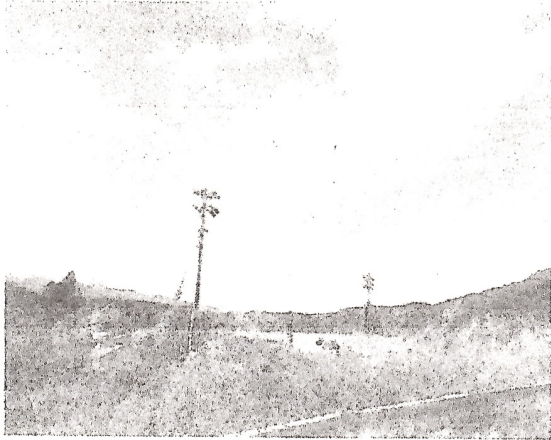
らうかと考えてみてはどうだろうか。白馬に移住した方と話す機会があった。後立山連峰が毎日自宅から見えると期待して建物の西側の窓は広めにしたので毎日の西日が厳しく、窓はほとんど

アドバイスを願いたいものだ。私たちが何の疑問もなく生活する食文化も珍しいと話している旅行者に出会う。お盆に天ぷらを揚げて仏前に供え、家族の食卓を賑わすのを不思議がる。

する地域住民をよく見かける。長野市の統計数値でも小麦粉、食用油の消費額も全国上位。自家用野菜の天ぷらをいつも家族一緒に食べていると話す家庭も多い。

## 定住者を増やすためにも、訪れる皆さんに地域の日常を積極的に伝えよう

ど「病氣」の意味まで、広く使われている言葉となるので、今の風はどんな風が潜んでいるのか考えることも大切だと知人の加藤和郎さんから教えていただいた。皆さんには、どんな風が吹いているのだとカーテンを閉めて、いと切なそうに話す。長年住み続けている私達は当たり前と思っていた現実にはハッとすると、建築に携わる皆さんにも、そんな声がある事を建築主に事前に話す機会があればぜひ



何気なく見ている雲の姿だが、珍しい雲だと思ふ事例が多くなってきている